文書館の逸品展

山の産業

山は、古来より多くの産業を育んできました。
歴史資料を通して、阿波国で育まれた紙・お茶・
椎茸などの山の産業の成り立ちに迫ります。

入場無料

平成30年　　平成31年

【期間】10月30日(火)▶1月27日(日)

【場所】徳島県立文書館　2階　展示室

【開館時間】午前9時30分～午後5時
【休 館 日】毎週月曜日・毎月第3木曜日
（祝日と重なる場合は、その翌日が休館）
年末年始（平成30年12月29日～平成31年1月4日）
【展示解説】11月18日(日)・12月14日(金)
1月12日(土)　午後1時30分～

文化の森総合公園　徳島県立文書館
Tokushima Prefectural Archives
〒770-8070　徳島市八万町向寺山
Tel.088-668-3700　FAX.088-668-7199
http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp

ごあいさつ

このたび徳島県立文書館では文書館の逸品展「山の産業」を開催いたします。

徳島県は総面積の約８割を山間部が占めており、西日本第２位の標高を誇る剣山をはじめとして四国山地・阿讃山脈ともに急峻な山々が連なり、そこには豊かな自然が息づいております。

山は人々の生活を支える生業の場でもありました。室町時代の「兵庫北関入船納帳」に記載されているように、中世以来、林産業は本県の主要産業でした。江戸時代になると美馬・三好郡の山間部を中心に煙草の栽培が重要産業へと発展します。また、山で生産される薪炭や松葉などは製塩用の燃料として塩田地帯を支え、同時に人々の日々の暮らしに欠かすことのできないものでした。このようにして生み出された山の産品は平野部の生業を支えると共に、そこから生み出された富により山間部は多くの人口を有し、豊かな生活文化を根付かせました。

「山の産業」はきわめて幅広く、膨大な研究蓄積があります。今回の逸品展では、当館が収蔵している古文書・公文書・古写真などを通して、その一端をご紹介しようと思います。ご覧になられた皆様が山の産業の歴史に興味を持っていただければ幸いです。

最後になりましたが、貴重な歴史資料を当館にお預けいただいた所蔵者をはじめとする関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成３０年１０月３０日

徳島県立文書館長　徳野　隆

山の製紙業と楮

『阿波志』によれば、紙やその原料である楮を産物としてあげているのは、麻植・美馬・那賀・海部郡といった山がちな地域である。山間部において、楮の産出や製紙業が主要な産業のひとつであったことがうかがえる。

同時に、徳島藩にとっても製紙業は重要な産業であり、江戸時代には紙の専売制が敷かれていた。藩は、製紙業を営む村に「紙方見取役」や「紙制道人」といった役人を任命し、紙漉人や上納紙の管理、抜紙（紙の不正売買）の監視をさせて、厳しく取り締まっていた。「紙方見取役」や「紙調方」（上納紙を調達・管理する役人か？）を務めていた、勝浦郡瀬津村（現・上勝町生実）の庄屋美馬家文書から、山間部における製紙業に関する史料を紹介する。

◎徳島藩南方における楮の産出

美馬家文書の中に、19世紀半ば（天保年間後期～安政期）に作成された皮楮・皮楮代銀受取証が26点ある。この中には、受け取ったものが、皮楮なのか代銀なのか不明なものもあるが、差出人の肩書きから皮楮や紙を産出していた村がうかがえる。差出人の所在は以下の通り。

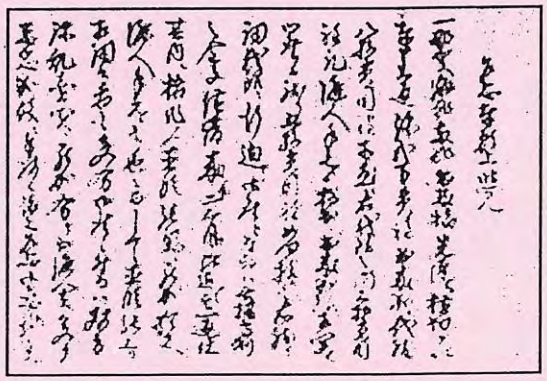
◎勝浦郡：黄檗村、坂本村、野尻村、福川村、藤川村、傍示村

◎那賀郡：老ノ木頭（木頭村の一部か）、木頭名村、坂州村、沢谷村、高野村、当山村、日真村

◎海部郡：海川村、川又（川俣）村、北川村、小計村、白石村、助村、成瀬村、深森村、符殿（府殿）村、古屋村、南宇村

このように、３郡にわたる村の名が見え、美馬家文書に見られる村々だけでもかなり広範囲に楮が栽培され、流通していることがわかる。

◎製紙と楮



1839（天保10）年、諸紙調人美馬泰次が紙方代官手代に提出した「乍恐奉願上覚」によると、那賀・海部両郡から楮が２万貫（約75ｔ）産出されたという。しかし、楮作人が値段をつり上げるため、紙漉人は楮の購入ができず、紙の生産に影響が出かねない状況となった。泰次は、この問題を解決するために、まず藩が、産出された楮を一括で買い上げ、楮皮を紙漉人に渡すように願い出ている。藩が買い上げた楮の代銀は、製造した紙を上納することで返済するとしている。

製紙業にとって、その原料である楮の確保は重要な課題であった。紙の生産に責任を持つ立場であった諸紙調人泰次によるこの願書は、流通を円滑にして紙の生産を安定させる方策を示したものといえるだろう。

阿波の茶

徳島県で茶と言えば「阿波晩茶」が有名だ。一般的な茶の製造過程では、茶葉を煎ったり蒸したりするのだが、阿波晩茶は茶葉を大釜で煮て桶に漬け込むという全国的にも珍しい方法で作られる。いつ、どこで製造され始めたのかは不明である。弘法大師が中国より種を持ち帰り、仁宇谷（現・那賀町）において製法を伝えたという話も残されているようだが、裏付ける証拠はなく伝説の域を出ない。

坂州木頭　晩茶の製造

茶は、摘む時期や製法によって寒茶・緑茶・晩茶・番茶などと呼称が変わる。1876（明治９）年の三好郡内の各村の状況を記録した『阿波国三好郡村誌』においても、「茶」・「晩茶」などと書き分けられている。しかし、当時の製法に関する史料がなく、現在の呼称や製法と一致するかは明らかではない。

江戸時代は、水田や麦畑以外にも年貢が課せられていた。野間（現・神山町）の1608（慶長13）年の検地帳の写しには「茶畠１坪につき米１升６合６勺に相当する」と定められている。他にも桑・柿・栗・漆などが記されており、「１本につき米９合」などと換算されている。これらは作物全般という意味の「上毛」と呼ばれる。江戸時代は石高制であるため、土地の生産力は米で表される。これら上毛についてもそのことが貫徹されていることがわかる。

また、借りた米の返済を相当額の茶でおこなうことが書かれた史料もある。文中には「来年６月に収穫した茶を、相場に照らして三荷（約144kg）用意する。もし三荷で足りなければ皆済分を渡す」とある。

那賀郡小仁宇村（現・那賀町）の庄屋である秋本家に残された史料には、管理していたと思われる茶畑の生産高が記されている。質を表す「大極上々」・「極上製」・「中製」などの記載もあり、幅広い質の茶が生産されていたことがわかる。別の史料には、徳島城下の東船場や籠屋町の商人が、仁宇谷製の茶を買い付けるために、那賀川流域の持井（現・阿南市）に問屋を置く要望をしていることが記されている。詳細は不明だが、どうやら商人のビジネス構想と生産者の意向とが合わず、実現しなかったようだ。それでも商人は再度交渉してきている。現代でも、商品化されることによって、生産者はある程度のノルマや品質の維持を求められる。問屋の設置が実現しなかったのは、もしかしたらそのような商人と生産者の思惑の違いがあったのかもしれない。他方、利益を生むと目して徳島城下の商人が交渉に来たということは、仁宇谷の茶がもつ確かな魅力や価値の表れであり、その評判が城下へも届いていたということである。

シイタケ栽培について

江戸期から明治期におけるシイタケ栽培に関する話題を２例紹介する。

本題に入る前に、クヌギ、コナラなどを利用してシイタケを栽培する、いわゆる原木栽培のはじまりについて説明したい。現在行われている原木栽培の原型となる栽培方法がいつごろから始まったかは定かではない。遅くとも1700年代には、伊豆で原木栽培が行われており、1800年代に入ると和歌山藩を始めとして10藩ほどに普及していたようである。

さて、原木栽培は原木の伐採から伏込(ふせこ)み(シイタケ菌を原木に増殖させるために林で管理すること)、榾木(ほだぎ)の浸水、収穫、乾燥まで、すべての工程において多くの人手を要する、いわゆる労働集約型の産業である。この種の産業に起りがちなことの一つに賃金問題がある。

粟飯原家文書「乍恐奉願上覚」を見てみよう。これは、1849（嘉永２）年に上山村下分（現・神山町）の百姓常次郎が名東名西郡代の手代に宛てた、自身の未払賃金の支払いを求める願書である。常次郎はシイタケ栽培の支配人(栽培責任者)として、1832（天保３）年春から雇われていたが、1849年８月までの未払い賃金が元利合わせ銀１貫213匁余に上るというものである。(未払いがいつから発生したかは不詳。)

この結末は不明だが、この文書には原木栽培の最初の事業主徳三郎が資金不足に陥ったため、事業の継承を富家の小浜策玄に頼み込んだという趣旨の記述もある。原木栽培には相当な資金が必要であったことがうかがわれる。

２点目は、「勧業資本金貸下御願控」（1894（明治27）年１月）である。これは貞光村(現・つるぎ町貞光)の小野寺庫雄が徳島県知事宛シイタケ栽培資金の一部として金１千円の貸付を願い出た文書である。この願いには、徳島県の農工業の発達を促し、物産の改良増殖を目的とした勧業資本金の貸付が、1893（明治26）年に徳島県議会の議決を経て制度化されたこと、小野寺庫雄がシイタケ栽培を始めたのは、1890（明治23）年に徳島県が雇い入れた静岡県のシイタケ製造教師月出正年の出張による講習指導がきっかけであったこと、1892（明治25）年には、静岡県狩野村(現・天城湯ケ島町)の楳原忠右衛門を自費で職工に雇い、栽培成績は徐々に良くなってきていること、さらには、徳島県におけるシイタケ栽培の起業、発展のため尽力したい旨の決意も記載されている。

以上のことから、徳島県ではシイタケ栽培を農林業分野の殖産事業の重要な一つと位置づけていたこと、そのために貸付制度が設けられる４年程前から、官民協調して周到な諸準備を行っていたことなどが読み取れる。

なお、参考として明治期の主要な食品類の輸出額を掲げる。

輸出額表（主要な食品類）　　単位千円

物品別／年次	茶	米	スルメ	コンブ	シイタケ	ホシアワビ	イリナマコ
1874	7,193	332	383	259	214	190	188
1877	4,288	2,269	414	339	329	170	168
1887	7,330	2,255	1,051	462	443	361	250

注１　「日本帝国統計年鑑」（内閣統計局）の数値を基に作成した。
注２　物品別で一部整合性に欠ける部分がある。

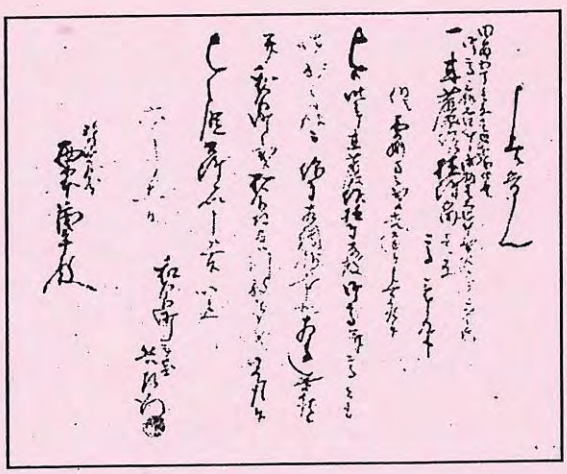
仁宇谷産物

仁宇谷は那賀川上・中流域に位置する県内屈指の林業地帯である。江戸時代には仁宇谷58ヶ村と称されていた。近くには、弥生時代から古墳時代にかけて水銀朱の原料である辰砂の採掘遺跡である若杉山遺跡（阿南市水井町）が存在するなど、古代より資源豊かな地域である。ここでは炭・材木・薪など林産資源以外にどのような産物が生産され、人々の生活を支えていたのかを、残された史料の中から紹介する。

◎那賀郡仁宇谷産物見込書・縦帳

仁宇谷産物一年間の産出見込額が種別に書かれている。上流で高瀬船（川船）に積まれた荷物は、中島浦（現・阿南市）で集荷され、江戸・大坂方面へ出荷された。炭・板・材木・柴・薪・上製茶・並茶など多くの産品をあげており、見込み出荷額も高額に設定されている。

◎申上ル覚（甘蔗作植付反数調に付報告）



江戸時代砂糖は大変貴重な品物だったため、庶民の口に入る様になったのは、中期頃からと言われている。徳島では現在も阿波市・板野郡の産物として作られているが、この史料は、幕末期の那賀郡和食町（現・那賀町）で甘蔗（さとうきび）が植え付けられ、僅かながらも砂糖が生産されたことを裏付けている。また、隣接する土佐町・小仁宇村でも砂糖生産高の増減を調査する藩からの廻状があり、砂糖生産があったことをうかがわせる。

◎御定御相場付（蘭山・初音・新柳等上製茶銘並びに生産者名）

茶は現代でも仁宇谷を代表する特産物である。上製茶から番茶までの銘柄と相場価格・生産者名が書かれており、仁宇谷一帯で盛んに栽培され取引されていたことがわかる史料である。

◎覚（高瀬舟建造に付、検地負（私有林）の持木根伐り見分願）

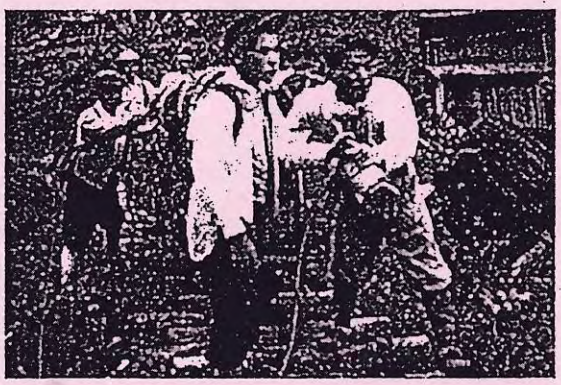
高瀬舟は、一度に多種多様の物資を運搬する手段として適していた。高瀬舟を建造するため、百姓が所有する山の木を伐採するにあたり御林目付に宛てた許可願いである。高瀬船の建材となるような大木は、たとえ私有林であっても藩によって厳しく管理・保護されていた。

山のエネルギー

かつて日本の木材消費は、建築用材よりも薪炭材として伐採・利用されることが圧倒的に多かった。日本の山は「エネルギーを作り出す山」であり、林業の多くは「エネルギー産業」であった。1955（昭和30）年頃まで、家庭で使用されるエネルギーの70％以上が薪や炭などの燃料材でまかなわれていた。

その後、薪・炭に頼っていた風呂・暖房・炊事などに使用される家庭用燃料は、石油・ガス・電気などに置き換わり化石燃料化が進んだ。エネルギー生産の役割を失った山間地からは多くの収入源と雇用が失われ、離農や過疎化が急速に進んだ。しかし、近年再生可能エネルギーとして木質バイオマスなどが見直され、山のエネルギー産業の再興が期待されつつある。

また、水力発電も山間地発のエネルギーとして、明治末期から県内の適地に建設が進んだ。水量の豊かな渓流を利用した発電事業は、山間地の産業全体を支えるインフラとして定着し、その後の徳島全域の電力事業および産業全般を支える礎となった。



木馬による炭だし（昭和29年半田町）

◎薪と木炭

古くから家庭用燃料の主力は、薪と木炭であった。県西・県央地域では、松材や広葉樹の雑木を主に、海部地方では黒木と呼ばれるエノキ・サカキ・クリ・シイなどの樹木を樵木（薪や炭の原木）として生産していた。

また、木炭は阿波国内一円の山間地で、煙の少ない高出力の燃料として生産されていた。こうした薪・炭は川の流路を利用し、筏や船で川下へと運ばれ港町を通じて徳島城下などの消費地に流通しており、山間地の大きな収入源であった。

表面が灰のため白く、叩くと金属音がする白炭は、カシを原料とするもので最上とされていた。他の木を焼いたものは雑木炭と呼ばれたが、黒いため黒炭とされ区別されていた。

◎水力発電

徳島県は水資源に恵まれ、水力発電が早くから導入された地域のひとつである。徳島県内で最初の発電所は火力発電で、1895（明治28）年に徳島市内で電灯が灯された。最初の水力発電所は辻町発電所（現・三好市）で、1908（明治41）年に辻町の刻み煙草業者12名が資本金7万円（現在の約15億円）をつぎ込んで建設され、刻み煙草工場に導入されると共に、辻と池田の400戸余りに電灯が灯された。当時、徳島市内でも珍しかった電灯が、いかに早く県西部にもたらされたかがわかる。水力発電の果たす役割は、時代背景に応じて変化しているが、限られた資源のなかで安価で安定した電源として改めて注目されている。

展示資料一覧

No.	表 題	年 代	資料番号
山の姿			
1	御両国絵図(阿波国絵図)(複製)	(近世前期)	国文学研究資料館蔵
2	阿波国絵図(分間図)	(近世期)	ﾀﾆｹ00436
3	東祖谷の絵図	(近世期)	ｻｶｲ00268
山の製紙業と楮			
4	覚(皮楮代受取)	1841(天保12)年か	ﾐﾏｹ00690
5	乍恐奉願上覚(那賀海部出来楮買上げ漉人へ楮皮代を貸付け中折紙にて返上	1839(天保10)年	ﾐﾏｹ01725
6	申上覚(山分紙漉人共楮調方存寄書・下書)	1851(嘉永4)年か	ｱｲﾊ00997
7	楮調日賀恵簿	(明治期)	ﾀｶﾐ01577
阿波の茶			
8	預り申米之事(年貢上納米借用の義並に返弁は茶三荷の旨等奥書の件・控)	1743(寛保3)年	ｱｷﾓ00130
9	右罷越候両人と(市中東船場土佐屋和助等両人の当谷筋出来茶持井にて出張問屋願出に付組頭庄屋より廻状の件・控)	文政年間頃	ｱｷﾓ01539
10	開拓地茶楮植付事業書類(茶植付方伝授)	1879(明治12)年	ﾀｶﾐ01446
11	第15号(神山旧村検地帳・棟付帳関係文書外・写)	大正期か	ｱｲﾊ01860
シイタケ栽培について			
12	乍恐奉願上覚	1849(嘉永2)年	ｱｲﾊ01020
13	椎茸作込置場之図	1890(明治23)年か	ｵﾉﾃ00465
14	椎茸用木伐倒ノ図	1890(明治23)年か	ｵﾉﾃ00466
15	椎茸作場之図	1890(明治23)年か	ｵﾉﾃ00467
16	勧業資本金貸下御願	1893(明治26)年	ｵﾉﾃ00495
山のエネルギー　樵木・薪・炭			
17	覚(塩薪・松葉仕成之事)	(天明6)年	ﾅｶｲ02519
18	林方代官所(達、水崎村高畑御林小仕成・鍛冶炭仕成年限延長の件)	(江戸期)	ﾂﾕｸ00725
19	覚(日和佐八郎山御林下草伐流並びに炭仕成の件)	(江戸期)	ﾐﾂｲ01296
20	吹田茂右衛門(書簡、阿井村安兵衛持山炭仕成元入銀の件)	(江戸期)	ｶﾝﾀ00289
21	定役証(松炭2,000石売買)	(江戸期)	ｶﾝﾀ00289
山のエネルギー			
22	昭和25年度　法令審査綴	1950(昭和25)年	K200200082
23	昭和25年度　木炭検査条例規則関係書類綴	1950(昭和25)年	K201300432
24	仮契約書(徳島電灯から徳島水力電気への営業・財産譲渡)	1911(明治44)年	ｲﾜｷ00443
25	徳島水力電気株式会社新株式募集	1919(大正8)年	ﾊﾔｼ00990
26	意見書(徳島水力電気の水力発作のための堰について)	1912(明治45)年	ﾌｷﾀ01362
仁宇谷産物			
27	那賀郡仁宇谷産物見込書	幕末期	ｲﾉｳ05048
28	申上ル覚(甘蔗作植付反数調ニ付報告)	1848(嘉永元)年	ｸﾘﾓ00236
29	廻・甘蔗作高砂糖作高取調之件	1865(慶応元)年	ｱｷﾓ00733
30	御定御相場付(蘭山・初音・新柳等上製茶銘并生産者名)	幕末期	ｱｷﾓ01192
31	覚(高瀬船建造ニ付検地負之持木根伐リ見分願)	文政期	ﾂﾕｸ00682

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

☆担当職員による展示解説　(文書館2階講座室・展示室)
日時：11月18日(日)・12月14日(金)・1月12日(土)　午後1時30分から

文書館の逸品展
「山の産業」
平成30年10月30日発行
編集・発行　徳島県立文書館